

授業で
使えるネタ

“記念碑”で語る愛国と公共の精神

昨年12月、教育基本法が実に60年ぶりに全面改正された。

「公共の精神」という言葉と、第二条第五号には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」という条文が新たに盛り込まれた。

この「公共の精神」と「我が国と郷土を愛する」という言葉を見るとき、占部賢志氏（福岡県立太宰府高等学校教諭）が綴っていた以下の歴史エピソードが思い出される。

7世紀半ばの朝鮮半島では、新羅が唐（中国）の力を借り統一に乗り出し、日本と交流の深かった百済を滅ぼした。百済から救援を求められた日本は兵を送り、その中の一人に福岡の農民の太伴部博麻がいた。

日本軍は朝鮮半島の西岸・白村江の戦い（663年）で大敗し、太伴部博麻も捕虜としてつかまり、唐の都・長安に連れて行かれた。そこには先に捕虜になっていた4人の日本人がいた。

5人が長安で捕虜の生活をしていたある時、唐が日本を侵攻するという話を聞いた。「このままでは、私たちの祖国・日本が滅ぼされてしまう」。

そこで太伴部博麻（以下、博麻）は、自分の身を奴隷として売り、それで得たお金で他の4人に日本に帰国してもらい、その情報を伝えてくれと託した。

4人が帰国し、日本も事前にその危険性を察知しており、九州に防人を置き、水城（九州の大宰府を防衛するために築かれた土塁と濠）を築き防衛に努めていた。幸いにして、唐や新羅の国内事情により戦争にはならなかった。

その後28年たった690年、博麻は、我が国と平和を回復した新羅の外交官と一緒に日本に帰国することができた。それを聞いた持統天皇（645～702）は大変に喜ばれ、『日本書紀』には「朕嘉厥尊朝愛国売己顕忠」と記されている。

ここに愛国という言葉が出てくる。この一文は、「朕、^{ちん}厥の朝を尊び^{おも}国を愛ひて、己^{おのれ}を売^{あらわ}りて忠^{よろこ}を顕^よすことを嘉ぶ」と読むことができる。占部賢志氏は、これを次のように訳している。

「わたし（持統天皇）は、日本を大切にし、心からこの国を思いやり、自分を奴隷に売ってまでしてまごころを尽くしてくれたことに心から感謝します」

誰しも異国の地にあれば、望郷の念は強い。しかし、自分が育った故郷が危険にさらされると思った時、博麻は自分の身を捨て祖国の安泰を選択した。

人間はともすると、今さえよければ、自分さえよければと思いがちである。しかし、自分が育った土地、生を受けた根拠としての父母、そして世話になった人々、あるいは共に生きて行く同時代の人々、さらに自分の子や孫という次世代の人々に思いを寄せ行動しなければならない時がある。これが「愛国」と「公共の精神」の意味であろう。

太伴部博麻の記念碑は、江戸末期の文久3（1863）年に地元の有志らによって建立され、その出身地である福岡県八女市の北川内公園に今もある。

（筆者：光岡洋一・教育ジャーナリスト）

*本稿は『学校マネジメント』（2007年5月号、明治図書）より許可を得て転載しました。



太伴部博麻の記念碑（写真提供：八女市役所）



巻頭言 裏返しの記述から新しい日本史観の確立を

東北大学名誉教授
田中英道

余りにも偏向している戦後の義務教育における中学の歴史教科書に抗して、扶桑社の「新しい歴史教科書」が作られた。私はその編集に参加し、とくに文化面の監修を行った。たしかに採択は少なかったが、大きな一石を投じた。

既成の学界の階級史観、共産党史観に反対して、日本の歴史に文化史を多く取り入れた画期的なものであった。その後、私は歴史家として教科書運動から離れて、日本の歴史をもう一度再構築したいという思いで、ここ数年過ごしてきた。

市販された教科書の方は、初回では七十万部を越え、改訂版も十万部を越えている。このことが意味するところは、日本の一般人の歴史観と学界や教育界の歴史観と大きくかけ離れている、ということであった。

それは選挙で、共産党や社会党が全くの少数派でありながら、そのマルクス主義史観が学界、教育界では多数を占めている、ということの反映でもある。

よく「共産党が教科書をつくり、社会党がそれを教え、自民党政府がそれに金を出す」と言われる。自民党政府は、戦後一貫して政府を司っているにも関わらずである。

歴史学界ではその理論的部分が、マルクス主義

をはじめ、装いを変えた階級史観や西洋史観にとられ続けている。それが日本の歴史にふさわしいという意味ではなく、学問は欧米から来る、と思いついでいる学者の非力さのもたらしめるところである。それらをいかに日本歴史に適用するかが学問と思っているからだ。

ただ単に歴史の中の、偏向した観点を取り除くだけでは真の歴史にならない。自虐史観の部分を消しただけでは真に誇りを持たせる歴史ではない。裏返しただけだ。

ただ単に歴史の中の、偏向した観点を取り除くだけでは真の歴史にならない。自虐史観の部分を消しただけでは真に誇りを持たせる歴史ではない。裏返しただけだ。

祖先たちが、懸命に生きてきたさまざまな点を評価しながら、現代の国際社会に生きる我々が、近代というものが与えた長所、短所を踏まえて、あらたな日本史観というものを確立していかなければならないのである。

ふと周りを見渡すと、日本の至る所に神社・仏閣が残されている。小さな神社が町中にもある。戦後それを否定的に見られてきたが、果たしてそれらを捨てて、西洋的な近代精神を確立出来たのか。その伝統の豊かさを、如何に現代に甦らせることが出来るか。日本人の宗教心というものが、意外に根強く残っていることを、かえって文化の伝統として再評価することが、教科書に課せられた課題でもある。



田中英道（たなか・ひでみち）
1942年東京都生まれ。東京大学文学部仏文学科・美術史学科卒業。現在、東北大学名誉教授、国際教養大学特任教授。専攻は美学、美術史。



2007(平成19)年7月1日発行(年4回発行)

株式会社扶桑社

教科書プロジェクト 編集人・真部栄一

〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL 03-5403-8899 FAX 03-3578-4010
E-Mail kyokasho@fusosha.co.jp
URL http://fusosha.co.jp/kyokasho
表紙写真 変化あさがお（撮影・橋本直久）

「教育再生」を具現化する全日教連の使命

今、学校が直面する問題は親の世代から

最近、子供による凶悪な犯罪がおこると、「普通の子供なのに」「いい子供なのに」というコメントがよく聞かれます。しかし、彼らは本当に「いい子」「普通の子」だったのでしょうか？

私はそんなことは決して「有り得ない」と思います。厳しい言い方になりますが、実際には、そういう子供たちは、いい子や普通の子ではなく、そういうフリをしていたに過ぎないのではないのでしょうか。そして人間関係が極めて希薄であり、少しでもいやな事があると過剰に反応する等、極端な行動に出た結果だと思っています。

そういう子供が増えた第1の原因は、人と人との関わり方が希薄になっているからだと考えます。今は、パソコンやテレビゲームなど、一人で十分楽しめる時代です。一人でいても十分に時間を活用する事ができるので、他者と関わる事がかなり減ってしまい、希薄化して、表面的な付き合いになるのです。

例えば、友達にイジワルを言われた時に、本来ですと怒るべきところです。毎日顔を合わせるのですから、怒るべきところで怒らないとストレスがたまります。でも、今の子供たちには、「今日だけ我慢すればいい。明日からは口をきかないから」という考え方をする傾向にあり、そのせいで物事に対して正面から対峙しない、心の弱い子供が増えています。

第2の原因は、親の子育てにもあると考えます。子供にとっての最初の先生は親です。ところが、今の親は、自分の都合が一番になっている人が多いようです。親になった以上、普通は自分の事は二の次、三の次で、子供が一番のはずです。教育する、育てるということは、そういうことです。でも、それを怠っている親が多いのです。

厚生労働省の調査で、「子供の子育てが苦痛に感じているか」という問いがあって、「苦痛だ」と答えている人が結構います。問題なのは理由の方で、「自分のしたいことができないから」とい

う理由の人が5割くらいいます。親であることを放棄していると思います。

そういう親に育てられた子は、就学前に親から学ぶべきことを学んできていないのです。

学校現場に広がる子供中心主義

そういう親が増えてしまったのは、学校現場に強く根付いている子供中心主義にも、問題があるのです。子供の主体性を尊重することは、大切です。しかし、本来教師が教えるべきことまで「自分で考えましょう」と指導を放棄した教育観です。

学校も、時間的な制約がありますから、いかに効率よく教えていくか、ということは大事なことです。時間は無限にあるわけではありません。教える場面と考えさせる場面を教師が見極めなくてはならない。それが我々教師の力量なわけです。

全日教連では、上記した子供中心主義を脱脚し、全てを子供任せにするのではなく、教えるべきことは教える、「指導」という立ち位置で子供に接しています。どの部分をどう具体的に教えるのかは、今後もっと研修を進め、明確にしていきたいと思っています。

全日教連と日本教育文化研究所

全日教連では日本教育文化研究所との連携を行い、教育文化に関する調査・研究を行っています。この日本教育文化研究所は、全日教連の姉妹組織です。両者とも「美しい日本人の心を育てる」という基本理念で一致しています。

今までの教職員団体の一番の目標というのは、自分達の身分保証でした。全日教連にもそういう側面はあります。ですが、数年前からは、それよりも自分達の教育の質を向上させることを一番の活動目標にしています。国民の教育に対する期待に応えることが何よりも大事なのです。

全日教連は、伝統文化を大事にして教育を行っていくことと、先生方が質の高い教育をしていくために、安心して教育を行える環境作りなどの提言・要望などを行っています。

一方、日本教育文化研究所は、そのための理論構築を行い、具体的な実践を推進したり、教育シンポジウム等の研修会を企画したり、と現場で頑張っている先生方を応援していきます。

全日教連の教師の他に、教師OBや一般の方、企業の方が、個人や団体の会員として入っています。「美しい日本人の心」を育てるためには、具体的にどの教科でどのような指導をすればよいかという教材開発や指導法を研究しています。

「美しい日本人の心」と社会科教育

美しい日本人の心を育むためには、教師ももっと勉強しなくてはなりません。

社会科に限った話ではありませんが、我々教師は本来、教科書で教えなければならない。ですが、多くの教師は教科書を……教科書に書かれていることをそのまま教えているのです。

時間的な制約がある中で、教師は教科書を100%信頼します。今でこそ、様々な教科書会社の教科書があるということが浸透していますが、以前は与えられた教科書が全てでした。その問題が、社会科という科目で顕著に現れました。

例えば、昭和12年に当時の中国の首都・南京の占領時に起きた南京事件ですが、深く教材研究をしていた先生方は、以前から「南京には30万人もいなかった」と言っていました。しかし、多くの先生は「教科書には30万人虐殺したと書いてある」ということを信用し、そのまま教えていました。文部科学省の検定済みですから、おかしい記述や間違いなどはないはずだと思ってしまうのです。

日本人として誇りが持てる教育を

結果、自虐的な歴史観が植えつけられ、自分たちの日本という国に自信が持てない人が増えてしまったのです。日本という国に自信が持てないと、日本人である自分にも自信が持てなくなります。そうしたことが積み重なって、現代の社会の歪みが生じているとも考えられます。

いかなる教科書を使ったとしても、自分が日本

人であることが恥ずかしくなるような内容の授業は、もう終わりにしなくてはなりません。勉強すればするほど、子供たちが日本人であることを恥ずかしく思う、日本人であることがイヤになるようなことでは絶対いけないと思います。日本人として誇りが持てるような学習でなければならないと思っています。

そのためにも、我々教師は教材をもっと研究する必要があります。日本は悪いこともしたかもしれませんが、それはそれで時代の事情もあります。事実は事実として教え、反省すべきところは反省する。そして、未だ不明な点については偏った指導をすべきではないのです。

教科書もまた、日本人であることに胸を張れるような内容が記述されている教科書であって欲しい、と願っています。

扶桑社の教科書は

扶桑社が初めて教科書を発行した平成14年版の教科書を見たとき、正直言って教科書の完成度は、今ひとつという印象でした。しかし、平成18年版の現在の教科書は改訂されて、他社と比べても遜色ないものになったと思います。

内容に関しても、当初は自虐史観に対する反論的な記述が目につきました。ただ単に、これまでの記述を裏返しにしただけという印象でした。今はそれも改善されて、中道を取った、バランスの良い教科書になっていると思います。日本人として誇りの持てるような教科書にして、今後もさらに完成度を高めていかれることを期待しています。



植田宏和（うえた・ひろかず）
1960年生まれ。徳島県出身。全日教連事務局次長、事務局長、副委員長を経て、本年4月に新委員長に就任。